

餘情の文學

潁原退藏

額原退藏

餘情の文學

白井書房

昭和二十三年二月一日印刷
昭和二十三年二月五日發行

餘情の文學

定價 七拾圓

著者 潁原退藏

發行者 白井喜之介

・京都市左京區北白川追分町八七

奈良縣丹波市町川原城

印刷所 天理時報社

印刷者 岡島善次

京都市京大北門前

發行所 白井書房

振替 京都九二二番
電話 上三九八〇番

(日本出版協會A二二一〇〇七)

餘情の文學

穎原退藏

餘情の文學

古典への信賴……………	一
永遠への思慕……………	二
餘情の文學……………	三
追憶と餘情……………	四
型について……………	五
表現の二重性……………	六
江戸時代の諷刺文藝……………	七
西鶴の人間探究……………	八

西鶴斷片	七
本文の註釋	八
眞理・調和・無私	九
良書の推せん	一〇
ことわざ	一〇六
童詞	一八
觀音に關する俚諺	一三〇
歌麿の女	一四〇
一面識の印象	一四九
柿	一五
淀川一覽	一六三
若葉の感傷	一七一
百日紅	一七四
名月と京都	一八三

古・典への信賴

眞淵や宣長の古典研究は學問として偉大な業績にはちがひなかつた。けれども彼等の學問からどんな新しい文藝精神が生れたであらうか。洒落本・黄表紙・川柳等の江戸後期文藝と所謂古學との間には、單に同じ時代に存在したものとして以上の交渉を見ることは出来ない。三馬の『浮世風呂』に「本居信仰にて古へぶりの物學びなどする」鴨子と梟子とが出て來る事は誰も知つて居るが、それはただ世相のある一面を描いたにすぎない。滑稽本がそれ故に宣長の古學に負ふ所が多いなどとは何人も考へないであらう。成程眞淵やその一派の間には萬葉調の和歌が盛んに行はれた。又今日雅文小説と呼ばれて

居る一種の古雅な文體の小説も起つた。宣長自身までが源氏物語の一卷を補ふべき『手枕』の創作に手を染めた。綾足は俳諧に片歌の古い形を復活させようとさへした。それらは確かに上代・中世の古典文藝への憧憬が、こゝに一の復興精神として現はれたものにちがひなかつた。しかしこの精神は遂に江戸後期の民衆文藝の中に生きる事が出来な
いで終つた。

滿洲事變以來の十數年間、我が國の指導層に立つ人々は自國の古典の尊重をしきりに説いた。この趨勢に乗じて國文學における古典研究は從來に見ない活潑な動きを示した。しかしこの古典の尊重と研究とは個人の解放を目ざし、人間性を中心とする近代文藝の精神に對して、むしろ反動的な立場にあつてなされた。それは軍國主義による封建的支配の下にすべてが決定的に動かされたからであつた。だから古典が尊重されるのも、その軍國主義的支配にそふべき限りにおいてのことで、學徒の視野は極めて狭小であり、理解は一方的に傾かざるを得なかつた。少くとも彼等はそのやうな古典の取扱方を強要

され、ある者は無反省にこれに迎合し、ある者は餘儀なく權力に屈服した。とはいへこの趨勢が國民の間に自國の古典に對する關心を深めた事は争へない事實である。さうしてこれまで西歐文藝の風調に動かされる事が最も多かつた文藝界に於てすら、自國の古典文藝から何かを得ようとする努力は、それが迎合的であるにせよないにせよ、とにかく一の機運として見られるに至つた。しかもそこから果してどういふ新しい文藝が生まれ出たであらうか。

よかれあしかれ、人は父祖からの肉體的精神的遺傳を拒むことは出来ない。古典はいつの時代にもそれを生んだ民族の中に、血の繋がりをもつて生きてゐる筈である。けれどもこの血は子孫に於てすでに新しい生命として流れて居る。だから古典が現代に生きるとは、それが過去に持つて居たまゝの形で再現されるといふ意味ではない。又祖先が尊ばれるのは、それが現在の自己を生む源泉力だからであつて、それだからとて新しい世代のすべてが祖先の規範によつて律せられるわけではない。宣長の古典研究への情熱

は、いかにも學問としてのみごとな科學的方法の下に大きな成果を收める事が出來た。

けれども彼の情熱は古典の優越性のみを信じて、それを通じての自己批判の眼を盲目にしてしまつた。だからかつてその古典が生み出された時のみが正しく、それ以後の文化はすべて否定せらるべきものであつた。さうして江戸時代にあつてもなほ古事記と萬葉とがそのまゝ文化の規範となり、源氏物語がそのまゝの形で最高の文藝となり得ると考へた。

最近の過去十數年間に於ける古典復興が、古典の現代に生きる意義がすでに理解されて居るべきにもかゝらず、宣長的立場への逆轉に外ならなかつた事は、日本の今日の混迷を招いた最大の原因であつた。古代文化の過度の稱揚、自己優越の仰々しい宣傳、それらが軍國主義的支配と結びついて居る事はわかつて居りながら、それをどうすることも出来なかつた所に今日の日本の悲劇がある。今やその大きな反動が來ようとして居る。即ち人は自國の古典への信頼を急速に失ひつつあるのである。權威ある大新聞すら

英語を國語の中に適當に取入れた新しい國語が生れてもよいと論じ、昨日まで古事記、萬葉物の出版に大童であつた書肆は、もう外國物の翻譯に血眼になつて居る。もとより如何なる變動があるにせよ、我々の心から萬葉を崇び源氏を愛し芭蕉を慕ふ情を失ふことはあるまい。しかしそれが單に祖先の古い影像をなつかしむだけのものではなるならば、未來の新しい文藝の展開とは沒交渉である。

古典は現代を束縛するものではない。いかにすぐれた古典といへども、それが直に現代の文化の規範とはなり得ない。たださうした古典の中には、過去から現在、現在から未來へと伸展すべき國民活力の源泉が藏されて居るのである。宣長的情熱が源氏物語と同じ抒情と文體との小説を彼の時代に送り出しても、民衆の文藝とは全く風馬牛で終る外はなかつた。軍國主義者達と便乗指導層とが古典尊重によつて封建的支配を強ひても、それが近代の文化に逆行するかぎり悲慘な破綻を招く外ないことは、今知りすぎる程知らされてゐる。かうして古典に對する態度のすべての誤りを人々は見て來たのであ

る。國民は古典への信賴を失ふかはりに、今こそ眞の意味の古典復興を志さねばならぬ。さうして日本の新しい文藝の誕生が西歐文藝の健全な攝取に期待されると共に、その攝取を可能とする活力の源泉を培ふすべを忘れてはならないのである。(二一・四六)

永遠への思慕

——古典に求むるもの——

「みたみわれ生けるしるしあり」とか「しこのみたてと出でたつわれは」とか言つたやうな歌だけをならべたものが、萬葉集だといふ風に學校では教へられて來た。そして教科書の中からは源氏物語だとか西鶴だとかの、古典としての存在は殆んど抹殺されようとして居た。この十數年來日本精神の宣揚といふ事と結びつけられて、古典の尊重が大きく叫ばれて來たにもかかはらず、學校教育を通して國民の身につけられた古典の教養とは、およそかうした極めて偏頗なものであつた。このやうな教養の中に育つた今日の青少年が、戰敗といふ冷酷な事實を前にして、古典への幻滅を感じるのは當然なことで

ある。のみならずたとひ抒情詩集としての萬葉集の一般的な本質が理解され、また源氏物語や西鶴がすぐれた古典であるべき意味が認められて居たとしても、それが所謂日本的なものの優越を證しようとする意圖に導かれて居たかぎりには、國民が古典への信頼を失ふに至るのをどうする事も出来ないであらう。

しかし古典とは何であるか。言葉の本來の意味から言へば、それはのつとるべきものである。即ち後世の人々がそれを法とし模範とすべきものの謂ひで、あらゆる精神的な活動の上に、それは常に何等かの目標として今も生きてゐるものでなければならぬ。だからある作品が眞に日本の古典の名に値ひするものであるならば、それは日本が勝つと負けるとにかくはらず、國民からの信頼を失ふことがあつてはならない筈である。いやこのやうな悲運に際し逆境に置かれた場合こそ、いかに生くべきかを最も力強く人々に指示するものでなければならぬ。それでは今我々は萬葉集から何を學ぶことが出来るのであらうか。又源氏物語から、徒然草から、西鶴から、芭蕉から、何が我々の生活に與

へられるであらうか。もし日本人のこれからの新しい、しかし苦難の多い歩みの上に、それらがただ幻滅の中に消え去るものであるならば、我々は一體何によつて生きて行き得るのであらう。もとより民主主義もしくは自由主義といふ最高の目標が、今國民の前にはつきり示されて居る。しかしその精神が眞に日本人のものとなる爲には、單に外から與へられたといふだけであつてはならない。やはりこれを内から支へ保つ力がなければならぬのである。と言つたところで、何も古事記や萬葉集に民主主義の精神を求めて、それを新しい地盤としようといふのではない。もとよりそれも意義ある事であらう。けれども古典が今日我々に働く力は、必ずしもさうした直接的なものでなくても宜い。むしろ民主主義自由主義がその最も高い精神的な意義で理解される爲の素地もしくは母胎たるべきものこそ、我々が古典の中に求めるものでなければならぬ。さうしてそのやうな意味に於ける古典を、果して日本は持つて居るのであらうか。

文藝は常に魂の自由な解放を求めて居る。現實はいつでも何等かの意味で人間の生活

を限定して居るのに對して、文藝は絶えずこの限定を超えて生きようとする力に動かされて居る。そしてそれが優れた文藝であればある程、この力は強い。同様な事は哲學や宗教についても言はれよう。例へば現實の人はすべて死によつて限定される。哲人や詩人や宗教家はその死のあなたに、限定されない何かを見出さうとする。しかし文藝は哲學や宗教のやうに、有限から無限への道を直接に説き示さうとはしない。そのかはりただ無限への人間のあこがれを歌ひあげるのである。しかもこの歌は人間の最も嚴肅な姿に於てでなければ、本當には歌はれない。さうしてこの歌に秘められた無限へのあこがれ、永遠への思慕こそ、神が人間の性情に與へた何よりも高貴な賜物であつた。日本の古典はもとより日本特有のものである。そこに日本特有の傳統が見られることは當然である。しかしそれが文藝の古典と呼ぶべきものであるとすれば、そこにはやはり永遠を思慕する烈しい、あるいはひそやかなげきが聞かれねばならない。それは古典として残るべき文藝には、必ず見られねばならぬ普遍の精神だからである。その意味で萬葉